

## 【議事】推3

### 第25号科学衛星 (ASTRO-G) プロジェクトの事前評価について

JAXAの宇宙科学研究本部の平林氏がサイエンティストの立場から期待される観測成果を説明（資料は傍聴者に配布されていない）したあと、下記の短い質問があった。

澤岡：「はるか」は6年間に750回の観測を行ったというが、1回の観測にどれくらいの時間が必要なのか。

平林：詳細な観測がしたければ丸1日かかる。地球が1回転「はるか」が40周する時間である。簡単に測ろうとすれば、10周回分、地球1/4回転で済む。

続いて文科省 事務局参事官付の水藤補佐が、資料3-2（事前評価結果（案））を説明し、その後下記のような質疑応答が行われた。なお、ASTRO-Gのプロジェクトマネージャである齊藤助教が同席し、回答に参加していた。

宮崎：目標の評価が「妥当7名、概ね妥当6名」を何で「妥当」にするのか。「妥当」のコメントの中には、「概ね妥当である。」と云うものがあり、これを「概ね妥当」にすると6対7で逆転する。

水藤：先ず、数で圧倒的な場合には多数決で決めるが、接近しているときにはコメントを見ながら事務局で判断させてもらっている。

青江：目標は高ければ良いというわけではなく、実現の可能性が十分でなければならない。

鈴木：開発研究の段階であるから、これから決めることであり、

今ははっきりしていないけれども妥当として良い。

佐藤：全体としてはチャレンジングな目標になっており、明らかに「妥当」である。

青江：「開発」までにはっきりさせていただく。

廣澤：国内の分は良いが、国大に関する記事では国際公募と見誤らないように気をつけてもらいたい。

井口：企業との関係の記述が少ない。トラブルの原因が企業の技術管理レベルに在った前例がある。企業を選ぶ際には慎重にやってもらいたい。品質管理は独創性を発揮してはいけないので、良く解る人と組んでやってください。

齊藤：サイエンティストとプロジェクトマネジメントを分けたのがその理由である。「要求」と「実現」の2本柱になっている。ISASのときの取り組みから新体制の下での新しいやり方に移して行く時期である。

松尾：（スペースVLBIで観測を行う）目的の説明を聞いた。私も長い間付き合ってきたが、一向に能力が上がらず、良く理解ができない。一方、科学者の方も一向に説明の技量が上がっていない。

森尾：ここでは展開アンテナを使っている。これは地球を見るのに利用できないのか。

齊藤：このミッションでは7 mmのメッシュを使っている。光には適用できない。

齊藤：衛星メーカーについて、要求がないので書かなかったが、プライム制は取らないことを決心している。製造の部分で企業に任せるところはあるが、システム全体を任せるとはしない。

青江：プライム制を取れとは言っていない。メーカと密接に連絡を取りながら進めてきたと認識している。

宮崎：「総合評価」のところで「国際的地位の向上」と書かれているが、意味がわからない。サイエンスと地位とがどうして繋がってくるのか。

青江：色々の意味を込めて書いている。また、計画部会においては「ソフトパワー」を主張しようとしている。